



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	主観的指標で地域の豊かさを測る
Author(s)	町野, 和夫
Citation	<雑誌> 地域経済経営ネットワーク研究センター年報, 4, 78-80
Issue Date	2015-03-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/58401
Type	departmental bulletin paper
File Information	18078Machino.pdf



＜第9回研究会＞

主観的指標で地域の豊かさを測る

町野 和夫

はじめに

過去2年間にわたって、主に2度の小規模アンケート調査¹⁾と過去の北海道庁のアンケート調査を基に北海道の地域別の「豊かさ」を測る指標づくりに取り組んできた。この取り組みは、過去の内外の各種社会指標を参考にしている。社会指標の開発は1960年代から始まりその後下火になったものの、近年の相次ぐ経済危機や格差の拡大、地球環境悪化などで再び世界的に活発になってきたが、60年代も現代も国や地域の政策目標が経済成長に偏りがちだったことの反省がきっかけとなっている。しかし60年代の国や地域での指標づくりは統一的な目標づくりに資することが目的であったのに対し、近年の指標づくりは、OECDのBetter Life Indexなどに代表されるように、生活の様々な側面ごとの分野別に指標群を作成し、それらをどう評価しどのような政策目標に展開していくかは、個人や地域それぞれに任せる、というようにその役割が変わってきている。筆者らはまず、2013年度初めのオホーツク地方と札幌のアンケート調査及びいくつかの統計データを基にして「豊かさ」指標を試作したが(西部他2013)、今回の調査研究では、前回試作した指標の問題点(後述)の分析を踏まえ、改めて2013年度末から2014年度初めにかけて行った上川地方と札幌のアンケート調査を基に新たな「豊かさ」指標を作成した(町野他2014)。本報告では、新旧の「豊かさ」指標の違いを説明するとともに、新指標を使った分析の可能性について、



いくつかの例を示しながら考察する。

新旧指標の違い

新旧の「豊かさ」指標の最大の違いは、前者では総合指標を構成する個別指標の中に、アンケートに基づく生活の様々な側面での満足度という主観的指標と、一人当たり所得や失業率などの客観的統計データが混在していたのに対し、後者では、個別指標はアンケートによる重要度の高い10分野の満足度のみであることである。主観的指標については、町野(2013)でも指摘したように、短期的にはその日に起こった些細な環境変化に敏感に反応し、長期的には逆にあまり変化しないという問題点がある。前者はアンケートの回答がその日の気分によって左右されることがあり、後者は、生活水準がある程度高くなると、それ以上経済が成長しても主観的幸福は高くないというイースタリン・パラドックスと呼ばれる効果である。イースタリン・パラドックスを個人レベルで説明すれば、人生で何か大きな(良いあるいは悪い)変化があっても、満足度は次第に元に戻るということである。これは、刺激の繰返しで快楽の感覚が鈍くなる人間の適応能力の高さと目標水準を再

1) 生活にかかわる40数項目のリストに対する重要度と満足度を5段階評価で尋ねるアンケート。その他に全般的な幸福度を0～10の11段階評価で尋ねる質問等もある。

設定することで到達度を見直すという欲望水準の再評価の両方のメカニズム（とくに前者）のためである。また、回答者の言語、文化的背景、宗教の違いによる幸福感の違いのため、国や地域間の比較も難しい。

そのため、旧「豊かさ」指標では個別指標には客観的統計データを基本とする指標作りを試みたが、重要な個別項目に対応する様々な客観的データを入手することは困難であったうえ、家族や友人との絆など、幸福に関係する重要な要因の中にはそもそも客観的データが存在しないものも多かった。そこで、客観データの得られない項目についてはアンケートによる生活の満足度を使い、客観的統計と主観的満足度を組み合わせた「豊かさ」指標の作成を試みたが、両タイプのデータの混在による単位の基準化や総合指標の解釈の難しさ、といったデメリットが大きくなった²⁾。従って、新「豊かさ」指標では主観的データのみで指標を作成することにした。結果的に新指標は、旧指標と違って住民アンケートで尋ねた全般的幸福度と整合的な結果を得られるなど、改善された指標となった。なお、上述の最近の趨勢に反して新旧どちらの「豊かさ」指標でも選ばれた個別指標群を合成した総合指標も作成しているが、それは、我々の「豊かさ」指標群が、地域ごとにアンケートの項目別重要度を使って上位10指標を選出したものだからである。即ち、地域ごとに組合せが異なる多数の個別指標群を比較するために総合指標が必要だと考えたのである。従って、総合指標を作っているものの、どの地域も同じ指標群を使う旧来の総合指標より地域の多様性を反映しているとも言える。

豊かさ指標の応用可能性

主観的指標は直接満足かどうかという質問への回答をそのまま数値化するため、当然ながら回答者が満足しているかいないかは明確に分かる。しかし、主観的なもので、地域間の違いや改善の程度を定量化することはできないし、政策目標を満足度の数値として設定するだけでは意味がない。指

標から具体的な政策を導き出すためには、さらに詳しい定性的定量的分析が必要となる。新たな「豊かさ」指標にはそうした分析に繋がるいくつかの発見があったが、その中の一例を紹介し、「豊かさ」指標の応用可能性を示したい³⁾。

表1は上川地方の男女別の「豊かさ」指標の構成項目である。注目されるのは、女性の「豊かさ」指標として選ばれた（即ち重要度が高かった）項目の多くが、地域全体の指標や男性の指標、そして札幌など他地域の指標と異なる点がある。これまでの調査で「豊かさ」指標の構成項目として選ばれた項目は、ほとんどが表1の上川の男性が選択した項目と類似していて、所得・仕事、健康・医療、環境、安全に関わるものであった。しかし、今回の上川の女性の「豊かさ」指標には、地域との関係、景観や住環境、余暇施設、買い物の利便性などが含まれ、中でも地域との関係、余暇施設、買い物の利便性についての満足度は、総合指標を下げる要因となっている。女性の方が日常の暮らしに影響する要因に敏感なため、人口減少による地方の暮らしの利便性の低下をいち早く警告しているのではないだろうか。

こうした比較分析は性別によるものだけでなく、地域別、年代別、あるいはそれらの組合せなど様々なものが考えられる⁴⁾。こうした主観的指標の分析によって、各地域で生活のどのような側面が、どのような住民（性別や年齢別など）の「豊かさ」達成にとって障害になっているかを把握し、さらなる定量的分析や実態調査によって具体的な政策を立案していくべきであろう。上述の二回の調査研究では、北海道の限られた地域のしかも少人数からのデータしか得られていない。今後は、さらに多くの地域で、地域ごとに異なる「豊かさ」

3) 本文で紹介する男女別の分析の他、地域別や年代別の分析も行ったが、それらは2006年度の北海道庁の類似のアンケート調査（ただし重要な項目である家族や友人関係に関する質問はない）のデータを使って、新しい「豊かさ」指標の手法で作成した指標を基に分析した。これは、過去2年間の我々の調査がオホーツク、上川、札幌という北海道の限られた地方のしかも小規模のアンケート調査しか行えなかったためである。

4) いくつかの例については町野他(2014)やMachino(2014)を参照。

2) 詳しくは、町野他(2014)を参照。

の達成に資するような指標作りを進めたい。

参考文献

町野・西部・平本（2014）「豊かさ指標開発と創造的
地域産業政策の総合」『北海道開発協会平成25年度
助成研究報告書』北海道開発協会。

西部・平本・町野・吉見（2013）「地域の多元的価値
を測定するための豊かさ指標の開発とその地域政策
への応用可能性の研究」『北海道開発協会平成24年
度助成研究報告書』北海道開発協会。

町野和夫（2014）「新たな『豊かさの指標』作成の試
みー予備調査からの考察ー」地域経済経営ネットワ
ーク研究センター年報，第3号，77-86頁。

（2013）「地域の『豊かさの指標』開発の可
能性と課題」地域経済経営ネットワーク研究センター
年報，第2号，37-54頁。

Machino, Kazuo (2014) “Measuring Regional Well-
being: New “Affluence Indicators” in Hokkaido”
The 11th Workshop on Social Capital and
Development Trends in the Swedish and Japanese
Countryside (August 21, 2014), Mid Sweden
University, Östersund, Sweden.

表1 上川地方の男女別重要度の高い項目

重要度	男 性		女 性	
	質 問 項 目	満足度	質 問 項 目	満足度
1位	自分や家族が健康であること	1.14	大気汚染、水質汚濁、騒音などの心配がないこと	0.94
2位	家族関係が良好であること	1.09	家族関係が良好であること	0.94
3位	必要な診断や治療がいつでも受けられること	0.14	働く場が確保されていること	0.39
4位	働く場が確保されていること	-0.24	町並みや景観がよく、心が安らぐこと	0.53
5位	家計が安定していること	0.49	安全で良質な住宅に住むこと	0.44
6位	救急医療が受けられること	-0.17	近隣との交流や助け合いがあること	-0.11
7位	小学校、中学校、高等学校で、充実した教育が受けられること	0.18	買い物に便利なこと	-0.19
8位	子供を健やかに生み育てることができる環境が整っていること	0.43	子どもを健やかに生み育てることができる環境が整っていること	-0.11
9位	友人関係に恵まれていること	1.00	スポーツやレクリエーションを身近で楽しめること	-0.24
10位	職場の人間関係が良好であること	0.20	高齢者が経済的に不安なく生活できること	0.29
同上	保育所など子育てを支援するさまざまな施設やサービスが整っていること	0.74	地域独自の伝統や文化が大切にされていること	0.06
同上	犯罪などの心配がなく安心して生活できること	1.09		

注：満足度の最高は2.0 最低は-2.0。

資料：Machino（2014）より筆者作成。（調査期間は2013年末）